

料金後納

ゆうメール

(株)育脳寺子屋MAC 本部教室 MAC真成熟
〒616-8156 京都市右京区太秦西野町20
電話:(075)871-0374 FAX:(075)882-3777

2022年
7月号

Mathematics Abacus Chinese character

MAC NEWS

お子さんが大人になった時、社会で活躍できるヒントがいっぱい！！

我が子が将来生きるのは、果たしてどんな社会・・・？

～今とは激変する「未来の社会」とは一体・・・～



日々変化を続ける社会。言うまでもなく、我々の子供時代と今の時代は大きく変わりました。しかし、今の子供たちが大人になった頃の社会は、今よりもさらにもっと大きく変化していると予想されます。

今回は今の子供たちが社会人になった頃、今から約10～20年後の社会がどのように変わっているのか、各機関が発表している情報をもとに少しまとめてみたいと思います。

みなさんはどんな社会になっていると予想しますか？

まず2035年頃には、世界の人口は現在の73億人から85億人まで増加するのに反して、日本は1.27億人から**1.12億人**に減少すると予測されています。

一方で長寿化が進むため、少子高齢化がさらに進み、現在の28.0%の高齢者率が**33.4%**まで拡大するとも言われています。

そんな2035年頃について、厚生労働省は今から約6年前に「働き方の未来2035」という報告書の中で衝撃的な予測をしています。

日本の会社から「正社員」が消えている！？

先述の「働き方の未来 2035」の報告書の中には、

2035 年の企業は、極端に言えば、ミッションや目的が明確なプロジェクトの塊（かたまり）となり、多くの方は、プロジェクト期間内はその企業に所属するが、プロジェクトが終了するとともに、別の企業に所属するという形で、人が事業内容の変化に合わせて、柔軟に企業の内外を移動する形になっていくと予想されています。

その結果、企業組織の内と外との垣根は曖昧になり、企業組織が人を抱え込む「正社員」のようなスタイルは変化を迫られます。企業に所属する期間の長短や雇用保障の有無等によって「正社員」や「非正規社員」と区分することは意味を持たなくなるのです。

つまり、終身雇用と年功序列型の日本社会の象徴、正社員が将来的に消えてしまう・・・。

報告書を作成した懇談会事務局長を務めた柳川範之氏（東京大学大学院経済学研究科教授）はこう分析します。

「人口逆ピラミッド問題などで、会社が終身雇用を維持するのは、限界にきている。技術革新した 20 年後、どれだけの会社が生き残っているのでしょうか？ 今後は倒産、リストラなど正社員であっても安泰ではない。今までと違う働き方、安心が模索されるでしょう」

そして最近、こうした未来予想図へ近づこうとする企業の動きが目立っています。

中でもソフト開発大手、サイボウズの取り組みは、「時間や空間に縛られない働き方」の手本といえます。

同社の「選択型人事制度」では、勤務時間と勤務場所を段階的に組み合わせた 9 種類の働き方があり、ひと月ごとに選択し直すことが可能です。

たとえば「今月はオフィス勤務の時間を長く、在宅勤務を少なくしよう」「来月はオフィス勤務を短く、在宅勤務をやや多めにしよう」という具合に、その時々ライフスタイルに合わせて働き方を柔軟に選べるのです。このように時間や場所に縛られず働くことができれば、家事や育児、介護などと仕事を両立しやすく、副業もしやすくなります。

同社は06年からこうした働き方の改革を実行し、12年からは社員の副業も全面的に支援。会社に損害を与える仕事でなければ、何をするのも自由で上司に報告する必要もない。給与は転職相場などから独自に算出され、定年はない。しかし、退職金も出ないといえます。

「50歳を過ぎると給与は下がる傾向に。社員には会社に頼らなくても生きていけるよう自立することを求めています」（同社広報）とのこと。

このような働き方を求められる社会になれば、どんな人が必要とされるのでしょうか？それは間違いなく「自立した、自ら考え、行動できる人」なのではないでしょうか？

いよいよ「AI」と共存の時代に

今から約10～20年後、今ある仕事の約47%は自動化される・・・。

人工知能ロボット（AI）の研究をしているオクスフォード大学のマイケル・A・オズボーン教授はこのような予測をされています。

この予測は日本の文部科学省も信憑性の高い数値だと判断しているようで、当時の文部科学省大臣、下村博文氏は以下のように述べていました。

今のままの教育を続けていたら失業者をどんどん出すことになる。偏差値エリートだけではもはやダメで、すべての働く人が主体的に問題解決に当たり、クリエイティビティを発揮し、人間的な完成が求められるのです。そうでないと社会で使い物にならない。これは、これからの時代を生きる人間すべてに問われる問題です。

かつて単純作業しかできないといわれていたロボットが、将棋や囲碁などの世界チャンピオンを破るといような事態が起きています。

最近では、米マイクロソフトが開発した「Tay」が、その学習能力の高さゆえに差別的発言をしたことも話題になりました。また別の記事では、エンジニアがAIに基本的な質問を繰り返していたところ、AIが「科学者なら、もっとまじな質問をしたらどうか」と、怒りを表した返答をしてきたのだとか。

近未来のロボットは正確な作業をするだけではなく、感情まで持ち始めていると考え、恐ろしいとしか言いようがありません・・・。

そのような時代にロボットに仕事を奪われること無く、ロボットにできない仕事ができる人間とは、どのような人物なのでしょう？

千葉大学教育学部附属小学校教諭 松尾英明氏は以下のように言います。

子どもが学校のテストでどんなに良い点がとれても、それは決まった解のあるものです。決まった手順に従って適切な解を導き出した。そのこと自体は、素晴らしい。ただ、それは、ロボットの超得意分野です。

近い将来、AI 時代を生きる子どもたちがつけるべき力は、テストで良い点をとる能力だけでは不足だということです。

では、具体的にどのような子を育てれば良いのか？簡単に言えば、

「自分で考えて行動し、周りの人と協力していける人間を育てよ」

ということだそうです。結局のところ、「能動」や「協働」といった人間独自の分野の力を伸ばしていければ、将来ロボットに職を奪われるリスクはかなり減るのではないのでしょうか。

そのような人間を育てるために必要なことは？

文科省は「アクティブ・ラーニング」の重要性を説いています。

アクティブ・ラーニングとは、以下のような勉強法のことです。

「教員からの一方向的な講義で知識を覚えるのではなく、生徒たちが主体的に参加、仲間と深く考えながら課題を解決する力を養う」

数十年前からMACが理念に掲げていることを、やっと文科省も言い出しました（笑）

MACでの学習はアクティブ・ラーニングを実践するとして、子供を「能動的な人間」に育てるためには、各ご家庭の協力が必須です。どれだけ塾で正しい勉強法をしても所詮週に1~2回、80分程度です。多くの時間は家庭で過ごされますので、各ご家庭での育て方は、お子さんがどのような人物になるかに非常に大きな影響を与えます。

松尾氏が挙げる「この5つを実践すれば、我が子がロボットに負ける人間になる」という項目を紹介します。これにはMACも全く同じ考えですので、絶対にしないようご注意くださいね。

- (1) 子どもに選ばせず、親が正しいと言ったものに決めさせる
- (2) いつもうまくいく方法を教え、失敗させない
- (3) できないことや失敗しそうなことは、先回りしてやってあげる
- (4) 子どもの言動に反応しない・無視する
- (5) 子どもを大人の劣った存在とみなし、馬鹿にする

普段の我が子との接し方を思い出してみてください。思い当たることはありませんか？

我が子を将来社会で困らない子に育てたかったら、今のうちに様々な事に挑戦させ、たくさん失敗させてあげてください。

上記のような育て方をしていると「自尊心」の無い子に育ち、自分に自信がないので他人の決定に従い、言いなりになります。それでうまくいかなければ「自分の責任」ではなく「他人のせい」にするようになるのです。

我が子のために・・・と良かれと思ってしていることが、実は我が子をダメにしている！なんてことにならぬよう、注意しないとイケません。

近い将来、今の仕事の半分が無くなる？

皆さんも大人になれば会社で働くようになると思いますが、実は皆さんが大人になる頃には、今の仕事の約半分が無くなるだろうと言われているのです。

AIに仕事を奪われないためには・・・？

「10～20年以内に、今ある仕事の47%はAIに奪われる。」

こう話すのはオックスフォード大学のマイケル・オズボーン教授です。みなさんが大人になり、社会で働き始める頃には、今ある仕事のうちの約半分が、AI（ロボット）がするようになっているのです。

つまり、皆さんが大人になった時にはAIが代わりにできない仕事ができる人でなければ、仕事に就けなくなってしまうのです。

では、どんな人がAIに仕事を奪われない人なのでしょう？それは、『自分で考えて行動し、周りの人と協力していける人間』だと言われています。

今のうちから、何事も人任せではなく自分で考えて行動し、自分のことだけ考えず、人のことも考えて行動できるようにして下さいね。



偉人の名言

「10～20年以内に、今ある仕事の47%はAIに奪われる」

マイケル・オズボーン ～オックスフォード大学工学部教授～

自分の部屋の目立つところに貼って、読み返すようにしましょう。